



**こんくうる**  
 渋川小1年 石坂 樹央  
 どきどき  
 どきどき  
 ぼくは  
 びあのまえ。  
 しろとくろの  
 けんぼんのうえの  
 ぼくのゆびは  
 きんちようしている。  
 さいしよのおとは、み。  
 ぼくのゆびが  
 はずんでる。  
 けんぼんのうえを  
 いたりきたりして。  
 だんだん  
 だんだん  
 たのしくなった。  
 おわった。  
 けんぼんのうえの  
 ゆびが、  
 ぼくのひざに  
 もどってきた。  
 おかえり。  
 がんばったね。



第八回少年少女の詩 江間章子賞授与式



**人間注意**  
 田頭小4年 伊藤 風花  
 焼走りに行く途中  
 「動物注意」  
 くま たぬき しかの絵をかいた  
 標識が目にとびこんできた  
 「くまをひいたら大へん。」  
 ハンドルをにぎっていた  
 お母さんが言った  
 動物たちだつて  
 「人間注意」  
 という標識を作っているかもしれないな  
 だつて 人間は  
 木を切りたおし  
 道路をつくり  
 家を建て  
 動物の住んでいる森を  
 切りくずしているんだもの  
 あつちにも こつちにも  
 森の中に標識が見えてきた  
 「人間注意」

# 第8回少年少女の詩「江間章子賞」

## 感動が筆を動かす

### 最優秀賞に当たる 江間章子賞に4人

今年で8回目となる少年少女の詩「江間章子賞」授与式は11月22日、大更小学校で行われました。

今回は、県内の小・中学校から566編の詩が寄せられました。

この日開催された授与式では、入選した32編(市内の児童生徒の作品は23編)のうち、市教育長賞以上の入賞者に、賞状などが贈られました。

最優秀賞に当たる「江間章子賞」には4人が受賞。いずれも市内の石坂樹央君(渋川小1年)、伊藤風花さん(田頭小4年)、伊藤奏瑛さん(平館小6年)、遠藤美咲さん(西根第一中2年)が選ばれました。ここでは、「江間章子賞」を受賞した4人の作品を紹介します。

江間章子賞を受賞した4人のほかに、市内から入賞した児童生徒は次のとおりです。(敬称略)

(敬称略)

#### ■八幡平市教育長賞

田村 京花(平館小4年)  
 三浦 加奈(東大更小5年)

#### ■八幡平市教育長賞

古館 竣(大更小1年)  
 後醍醐 真樹(渋川小4年)

#### ■入選

伊藤 慎太郎(平館小1年)  
 高橋 夢乃(平館小1年)  
 藤本 達瑠(田山小2年)  
 小笠原 里華(平館小3年)  
 竹田 千晶(東大更小4年)  
 沢口 勤太(大更小4年)  
 葛西 彩羽(大更小4年)  
 遠藤 春菜(田頭小5年)  
 山形 翔吾(大更小5年)  
 福士 一稀(平館小5年)  
 津志 田紗希(西根第一中3年)  
 工藤 大志(西根中2年)  
 松村 友希(西根中3年)

#### ■故・江間章子さんメモ

大正2年新潟県生まれ。幼少期を旧平館村(現在の八幡平市平館)で過ごす。昭和11年「春への招待」を刊行する。代表作「夏の思い出」は尾瀬への思いをつづった詩。昭和24年にNHKラジオ歌謡で放送されるなど長く人々に愛され、昭和44年には教科書にも採用されている。旧西根町の名誉町民第1号。平成17年3月12日に逝去。あと1日で92歳の誕生日だった。

#### ■江間章子賞メモ

平成7年に名誉町民に選ばれた故・江間章子さんの功績をたたえ、県内小・中学生が書いた詩に賞を贈る「江間章子賞」を平成10年に創設。江間さんは、3歳から小学6年生までの多感な時期を旧平館村で過ごし「作詞の原点になっていた」と生前に語り、同賞の選考委員長も務めるなど、小・中学生の育成にも力を注いだ。



**人間だって毛虫とアゲハチョウ**  
 西根第一中2年 遠藤 美咲

地味な色をして  
 モヤモヤした毛で  
 体が覆われている  
 奇妙な姿をした  
 嫌われものの毛虫  
 鮮やかな色で包まれている  
 大きな羽をヒラヒラさせて  
 飛びまわる  
 皆から好かれるアゲハチョウ  
 皆から気持ち悪がられても  
 どんなに自分が嫌いでも  
 必死になって生きていた  
 悪夢のようなあの頃  
 悪夢から目をさまして  
 殻を破った今  
 皆からまるで  
 妖精を見るような目で  
 見てもらえるようになって  
 大きくきれいに変化した  
 私達も同じ  
 今どんなに不格好でも  
 今どんなにちっぽけな存在でも  
 今それなりにがんばれば  
 殻を破った先に  
 待っている時の中で  
 必ず大きな大きな  
 存在へと きれいな存在へと  
 きつと変化しているはず  
 あのアゲハチョウを見る  
 すばらしいものを見ている時の  
 あの目で  
 見てもらえるように  
 必ずなっている